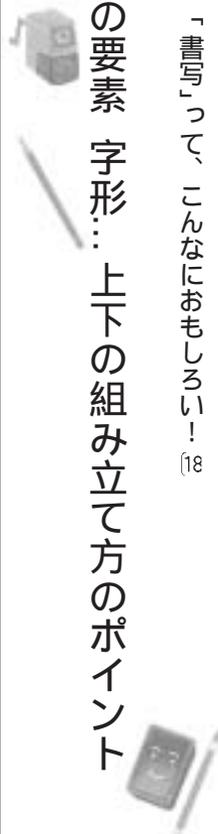


書写の要素 字形…上下の組み立て方のポイント

山梨大学教授

宮澤 みやざわ

正明 まさあき



今回は、上下の組み立て方のポイントを取り上げます。左右の組み立ての漢字に次いで多いのが、上下の組み立てによる漢字です。小学校で学習する漢字の約三割を占めています。「草」「雲」「点」「志」のように、かんむりやあしなどをもち漢字の多くは、上下に完全に分離して組み立てられています。また、「貝」「糸」「光」「見」のように不完全な分離ながら、図形的にとらえることと上下に分解できて上下の組み立ての要素があるものも多く見られます。上下の組み立て方の学習は、これらの漢字を中心に行われます。

完全分離型

不完全分離型

雲 点 糸 光

ここでは、これらの中で、注意が必要な字例を取り上げてみます。

幅になりますが、下に「女」「安・案（や）」「左右の払い」（実・寒）などがある場合は下部を最大幅に作ります。

あめかんむり

たけかんむり

雨 霽 雲 雪 竹 竹 笛

小学校で学習するあめかんむりの漢字は少なく、「雲・雪・電」の三字しかありません。しかし、使用頻度が高いので、しっかりと学習しておく必要があります。「雨」「霽」がかんむりになると、当然背を低くし、下部との調和を図る必要があります。「雨」の場合、「雨」の形を偏平にするだけでなく、「二・三画目の方向や筆使いが変化します。右図のように、雨の字形をそのままかんむりにする例が見られるので注意が必要です。」（この形は、大学生の調査では「二割程度出現します。単独形がかんむりになると点画が変化する例としては」「竹」があります。たけかんむりでは、縦画が点と短い払いに変化します。「雨・竹」の変化は、下部との接合を配慮しての変化といつことができます。

ひんむり

はつがし

△ 会 令 夬 発 登

うかんむり

宀 宀 完 宙 安 案 実 寒

うかんむりの一画目は縦点、二画目は左下への斜め点、三画目は左下へのはねです。一画目を左払いにしたり極端に内側に入れたりする書き方は、適切な書き方とはいえません。（また、三画目ははねはほぼ四十五度方向にはね、次の画に連続する気持ちをもたせたいものです。うかんむりと下部との組み立て方は、右図のようにうかんむりの中に横画なら二つが（元）、縦画ならその一部が（宙）入り込むように組み立てます。これらのことは、わかんむり（写・軍）、あなかんむり（空・究）、つめかんむり（受・愛）などにも応用されます。また、うかんむりの幅と下部の幅との関係は、多くはうかんむりが最大

ひとやねをもつ漢字は多く、組み立て方に習熟しておく必要があります。三角形に作られるひとやねの内部と下部との組み合わせは、上段左図のように横画（会）や点（令）が一つだけ入るように組み立てます。はつがしらは「発・登」の二文字しかありません。上下の組み立て方はひとやねと同様です。なお、はつがしらの中央部の接し方ですが、教科書体活字では「発」は離れていますが、字源が左右の足であることから、本来離れてもよいのでしようが、書き文字としては、接したほうがよいといつ考え方が多いように思います。

ひんむり

わつか

宀 宀 宀 思 宀 宀 照

この場合は、もともと偏平な形をしているので、あしになった場合にもさほどの変化は見られません。最近、「心」の二画目を右払いのようにつく傾向が強く、注意が必要です。ねつかは、四つの点の始筆を一直線上にそろえ、それぞれの方向に注意して偏平に並びつうに書きます。